

【A】概説

「あはひ」の時代の物語

飛鳥時代（592～710年）118年

奈良時代（710～794年）84年

平安時代（794～1185年）391年

鎌倉時代（1185～1333年）148年

室町時代（1336～1573年）237年

安土・桃山時代（1573～1603年）30年

江戸時代（1603～1868年）265年

明治以降（1868～2021年）153年

『平家物語』

『太平記』

『平家物語』全巻の構成

全十二巻＋灌頂の巻

六巻十六巻

別紙「平家物語目次」参照

【B】音読の方法

(一) 文尾を伸ばす

「韻文」っぽいところや「歌」など

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」

祇園精舎の鐘の声―

諸行無常の響きあり―

《応用》ちよつと節を加えてみる

※なぜ鐘の音を聞いたら「諸行無常」を感じたのか

参考・狂言『鐘の音(ね)』『ぢやんもんもんもんも』

※ケチャも

(二) ヒラキと日本語朗読法

※ヒラキ()のあとの二音目を当てる

これは西塔の武蔵坊、弁慶にて候。(能『船弁慶』)

ここに、五智院但馬。大長刀の鞘をはづいて、ただ一人。

橋の上にぞ、進んだる。(「橋合戦」より)

隴西の李徴は、博学才穎。天宝の末年、若くして名を、虎榜に連ね。ついで、江南尉に補せられたが。性、狷介。自ら恃むところ、頗る厚く。賤吏に甘んずるを、潔しとしなかった。(中島敦『山月記』より)

吾輩も ちよつと雑煮が、食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが、大抵のものは食う。何でも、食える時に、食つておこうという考から、主人の、食い剩した雑煮が、もしや、台所に残つてはいはすまいかと、思い出した。(夏目漱石『吾輩は猫である』より)

(三) 拍子(リズム)を取りながら読む

ここに、五智院但馬。大長刀の鞘をはづいて、ただ一人、橋の上にぞ、進んだる。

平家の方にはこれを見て、

「ただ射とれや、射とれや」とて、

差しつめ引きつめ散々に射けれど(も)、

但馬少しも騒がず、

上がる矢をばついくぐり、

下がる矢をば跳り越え、

向かつて来るをば長刀で切つて落とす。

敵も味方も見物す。

それよりしてこそ、『矢切りの但馬』とは、言はれけれ。

(「橋合戦」より)

【C】長い物語の読み方

(一) テーマを決めて読む

全体の構造を知ってから読む↓小説はダメかも
能になった『平家物語』

「おごり」の推移

運・命・時

『平家物語』の中の「死」

『平家物語』の中の「怪異」

(二) 人に話す

(三) 創作をする

詩歌を作る

能にする

一、軍体の能姿。仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことにことに、平家の物語のままに書くべし。これまた、五段のほどらひ、五音曲の長短を計らふべし。

演劇にする

ミュージカルにする↓宝塚歌劇、刀剣乱舞

● 『平家物語』の中の「死」

平清盛の「あつち死」

入道相国、病ひづき給ひし日よりして、水をだに喉へ入れ給はず。身の内の熱きこと、火をふくがごとし。ふし給へる所、四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。

ただ宣（のたま）ふ事としては、「あたあた」とばかりなり。少しもただ事とも見えざりけり。

比叡山より、千手井の水を汲み下ろし、石の舟に湛（たた）へて、それにて冷え給へば、水おびたたく沸き上がつて、ほどなく湯にぞなりにける。

もしや助かり給ふかと、笕（かけひ）の水を撒（ま）かせたれば、石や鉄などの焼けたるやうに、水ほとばしつて寄りつかず。おのづからもあたる水は、ほむらとなつて燃えければ、黒煙殿中に満ち満ちて、炎、渦巻いてあがりけり。



(二月四日に遺言したあと)

同じき四日、病に責められ、せめての事に板に水をいて、それにまろび給へども、助かる心地もし給はず。悶絶びやく地して、遂に「あつち死に」ぞし給ひける。

建礼門院の往生

かくて年月を過ごさせ給ふほどに、女院御心地ならず渡らせ給ひしかば、中尊の御手の五色の糸をひかへつつ、「南無西方極樂世界教主弥陀如来、必ず引撰し給へ」とて、御念仏ありしかば、大納言佐の局、阿波内侍、左右に候ひて、今を限りの悲しさに、声も惜しまず泣き叫ぶ。御念仏の声、やうやう弱らせましましければ、西に紫雲たなびき、異香室に満ち、音楽空に聞こゆ。

限りある御事なれば、建久二年二月の中旬に、一期遂に終はらせ給ひけり。

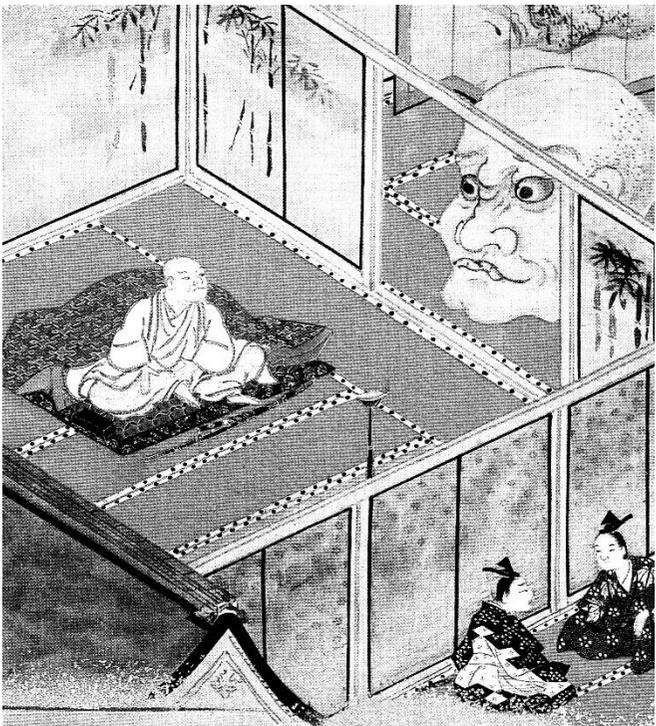
●『平家物語』の中の「怪異」 物怪(もつけ)の沙汰

〔治承四年…一一八〇年 清盛死去前年〕

都を福原へ遷されて後、平家の人々夢見も悪しう、常は心騒ぎのみして、変化の物ども多かりけり。

(一) 大きな顔

ある夜、入道の臥し給ひたりける所に、一間(ひとま)に憚(はばか)るほどの物の面(おもて)、出で来たつてのぞき奉る。入道ちつとも騒がず、ちやうど睨まへておはしければ、ただ消えに消え失せぬ。



(二) 虚空の笑い声

岡の御所と申すは、新しく造られたりければ、しかるべき大木もなかりけるに、ある夜、大木の倒るる音して、人ならば二三百人（二三千人、二三十人）が声して、虚空にどつと笑ふ音しけり。「いかさまこれは天狗の所為」と言ふ沙汰にて、夜百人、昼五十人の番衆（ばんじゅ）を揃へ、墓目（ひきめ）の番と名付けて、墓目を射させられけるに、天狗のある方へ向かつて射た時は音もせず。またない方へ向いて射たる時は、どつと笑ひなンドしけり。



(三) 髑髏

またある朝、入道相国、帳台より出でて、妻戸を押し開き、坪の内を見給へば、死人の枯髑髏（しゃれこうべ）どもが、いくらといふ数を知らず、坪の内に満ち満ちて、寄り合ひ寄り退き、転び合ひ、転びのき、中なるは端へ転び出で、端なるは中へ転び入る。おびただしう、からめき合ひければ、入道相国、「人やある、人やある」と召されけれども、折節（おりふし）人も参らず。

かくして多くの髑髏（どくろ）ども一つに固まり合ひ、坪の内に憚るほどになつて、高さは十四五丈もあるらんとおぼゆるが、山のごとくになりけり。かの一つの大頭（おおかしら）に、生きたる人の眼（まなこ）のやうに、大の目どもが千万出で来て、入道相国をはたと睨まへて、またたきもせず。入道ちつとも騒がず、ちやうど睨まへて暫く立たれたりければ、かの大頭余りに強う睨まれ奉て、露霜などの日に当たつて消ゆるやうに、跡形もなくなりにけり。